

# 仙台文学館ニュース

第三十号

Sendai Literature Museum News



ラ・サール・ホームへの坂道



井上ひさし『四十一番の少年』(1973年 文藝春秋)

坂道の右側は土砂崩れを防ぐための石とコンクリの石壁になっている。それが途中から芝生に変わった。利雄は立ち止まって、右手に展げた景色を眺めた。坂下の道が白い一本の線となつてはるか彼方、S市の市街まで伸びていた。

坂の上から十五番の少年が自分自身を呼んでいる声が聞えるような気がする。かつて、坂の上では、十五番と呼ばれたら、どんなことがあつてもすぐに返事をし駆けつけるのが何よりも大切な心得だつた。あれから二十数年経った今でも、利雄の気持の底には十五番へのこの犬のような忠誠心が残っているらしく、それが彼を坂の上へ引きずりあげて行く。

坂の上は立っ時を先に延しているのだ。それなら行かなければよいようなものだが、彼の耳には坂の上から十五番の少年が自分自身を呼んでいる声が聞えるような気がする。かつて、坂の上では、十五番と呼ばれたら、どんなことがあつてもすぐに返事をし駆けつけるのが何よりも大切な心得だつた。あれから二十数年経った今でも、利雄の気持の底には十五番へのこの犬のような忠誠心が残っているらしく、それが彼を坂の上へ引きずりあげて行く。

## 坂の上

文学のある風景

# 小池 光の 気になる日本語

19

## 四音熟語

長い外来語を日本語に移すとき、単語ないし熟語のカタマを取って四音化する傾向が日本語にはある。身の回りをみれば「パソコン」「コンビニ」「エアコン」「ファミレス」「セクハラ」「プレステ」「ハイテク」など枚挙に暇がない。

それぞれ「パーソナル・コンピュータ」「コンビニエンス・ストア」「エア・コンディショナー」「ファミリー・レストラン」「セックス・ハラスメント」「プレー・ステーション」「ハイ・テクノロジー」の略である。

このような現象は昨日今日に始まったのではなく、昔からある。わたしの学生時代なら「インテリ」「ノンポリ」などがまさにそうであった。

全部がカタカナでなくてもよい。片方に漢字が来る場合もある。「サラ金」「肉マン」「軽トラ」「合コン」「徹マン」「ゼロ戦」などなどいくらかもある。最近なら「駅ナカ」という新語がみるみるうちに定着した。駅の改札口を通った先にある商店街をいう。これは外来語の移入ではないが。

どうしてこうなるか。日本語の基本語彙は二音でできているもの

がとて多い。月、海、空、星、雨、雪、花、川、山、顔、耳、鼻、足、家、父、母、姉、兄、妻、犬、猫などなどみな二つの音の組み合わせで成っている。この二音の基本語彙を組み合わせてさまざまな概念を作る。だから、二プラス二で四音になるわけである。「パソコン」「コンビニ」「エアコン」などの語も、一見新しいようだが成立の根拠をたずねれば、この伝統の原則に忠実に従っているともいえる。四文字熟語というのがあるが、それになぞらえば四文字でなく「四音熟語」だ。日本語にはこの四音熟語がとて多い。

地名なども一番多いのは四音でできているものではないだろうか。青森、盛岡、仙台、山形、福島。東北地方の県庁所在地は秋田を除けばほぼみな四音である。東京、大阪、横浜、札幌、福岡、熊本、長崎、静岡、新潟、金沢などすべて二文字四音である。これは偶然ではない。

その四音熟語に一個の助詞を付ければ五音。俳句の五七五、短歌の五七五七七のカナメの五音はおそらくここに由来する。偶然のように見えるは必然的なのである。音の数で韻文の定形ができており、そういう言語はとも日本語だけらしい。

## 学芸室日記

○市内15館のミュージアムが連携した「SMMA」(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)で、2012年から行われている「ミュージアムユニバース」。専門分野が異なるミュージアムが一堂に会し、各館の持ち味を生かした体験プログラムや、トークイベントを行い、館の魅力を伝えるお祭りです。12月18日、19日の両日、せんだいメディアテークで開催されました。文学館は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館と社会福祉法人共生福祉会

島美術館と共同のプログラムを実施。文学館で作った和綴じ本に、合羽刷りや紋きり遊びで作った作品を貼り付けというものです。一つとして同じものない自分だけの一冊を手にし、体験された方はみな嬉しそうでした。



を用いたもので、中央に下がっているのは「ケンダイ」と呼ばれるしめ飾り。年末に職員が設置し、新年の開館日にお客様をお迎えしました。

○11月21日から1月24日まで企画展「人と街をつなぐーみやぎで生まれた本・雑誌」を開催しました。戦後県内で出版された本や雑誌、また地元の書店や出版社についてご紹介するも

のでした。会期中は、本の書き手、作り手、送り手の方々によるギャラリートークがあり、本の好きな方々が熱心に耳を傾けていました。今回の展示では戦後の雑誌・タウン誌の創刊年表や、1970～1980年代の市内書店地図を掲示したのですが、把握できなかった雑誌の情報や、閉店した書店の思い出など、数多くの声を寄せていただきました。お寄せいただいた情報は、蓄積し活用していきたいと思っております。ありがとうございました。



# 「火の鳥」黎明編

小学生の頃は、夏になると長野の祖父母のうちに滞在するのが恒例だった。

千葉から新宿に電車を乗り継ぎ、私も弟も乗り物酔いがひどかったからその時点ですでに

へばっていたが、さらに急行列車の自由席を確保するために母と弟とで新宿駅ホームで列に並んだ。長時間シートに座っているのが非常に大変だったのを覚えている。

母方の祖父母の家は平屋で、大きな家というわけではなかったが廊下が長く、くねくね折れ曲がっていた。トイレに行くのにはその廊下の奥のほうへと行かねばならず、おまけに小さな

黒い豹の置物が置いてあったりするものだから怖く、夜になればとにかくトイレを我慢した。

その廊下の途中に、書棚があった。たくさん本が並んだもので、大半は実用書のたぐいで子供の僕には興味のないものばかり、ただその中に漫画本が、主には「サザエさん」や「いじわるばあさん」だったが、手塚治虫の「火の鳥」もひっそりと置かれていた。虫プロ商事版と呼ぶのだろうか、箱入りのなかなか豪華な造りの本で、「黎明編」「未来編」「ヤマト編」「宇宙編」の三冊が並んで

でいたと思う。祖父母のものは思えないから、読書家の伯父が置いて行ったものだろうとは想像がついた。

箱入りの漫画本など見たことがなかった。貫禄があり、表紙の高級感も分量も、僕がよく知っている漫画本、コミックとは違って、手塚治虫の存在はすでに知っていたのだろうか。そのあたりはよく覚えていないが、とにかく、僕は未知なるものに触れる緊張を覚えながら読んでいた。

それまで読んでいた漫画は、一話完結の物語であったり、長編であっても何らかのパターンが繰り返されるものが大半であつたから、長大な映画のようなその漫画は（見得を切るような大ゴマが使われていないことも含めて）非常に新鮮で、大袈裟かもしれないが、この本の冒頭に出てくる火の鳥の姿のように、神々しいものと思えた。時折、繰り出される手塚治虫のギャグやパロディに少しほっとはしたが、それ自体がまた、こ

ちらを油断させる仕掛けにも思えたほどだ。

どれくらいの時間をかけて読んだのだろうか。

僕は漫画を読む速度は速いほうだったから、すぐに読み終えたのかもしれないし、とはいえず祖父母の家ですつと読んでいる状態も考えにくかったから、途切れ途切れに読んだのだろうか。

そのあたりはもはや記憶にない。強く覚えているのは、この作品の終盤で、主要な人物が次々と命を落としていくことへのショックだった。

「正義は勝つ」「主人公は生き残って、ハッピーエンド」というエンターテインメントの定石を信じていた年頃だったから、衝撃を受けた。いや、正確に言えばそうではないだろう。小学生ではあつたが、悲劇的なフィクションになじみがないわけではなかった。主人公が死ぬことや危機に陥ること、敗北する場面を、小説や漫画で読んだ経験はあつたはずだ。だから、この漫



画のどこにはっとさせられたのかといえば、それは、主人公（と僕が思っていた人物）や主要な人間たちの死が、劇的ではなく、あっさりと言られていたからだろう。それまでの僕の場合は、主人公の死や悲劇は、ドラマチックなもので、作品においては大きく取り上げられる場面だった。刑事ドラマの殉職シーンなどはその最たるものだ。

が、手塚治虫は、大事な登場人物たちが戦により殺されていく場面を、大きなコマを使うわけでもなく、淡々と描いていた。哀しみの余韻をこちらが感じる

暇もなく、物語はどんどんと続いていく。何か大逆転があるのではないかと期待するこちらの思いも容赦なく、打ち砕く。

この漫画は、人間たちの歴史を、愚かで悲しいが、だからといってどうにもならない出来事」を描く物語だった。僕はそのことを終盤に至り、突き付けられた。

救いがない、と言ってしまったらそうなのかもしれないが、小学生の僕はこの漫画のことがしばらく頭から離れなかった。強い者が勝ち、弱い者が負けていく。



やり切れないが、そこにあざとさはなかった。ラストには力強く生きようとする人間の姿が綺麗事ではなく、描かれていたからかもしれない。

翌年も祖父母の家で僕はその漫画を読み、また複雑な気持ちになった。そして祖母に、「この漫画をもらって帰ってもいいか」と訊ねた。

今もその、かなり古びた漫画が手元にある。

伊坂幸太郎(いさかこうたろう)  
1971年、千葉県生まれ。東北大学法学部卒業。2000年「オーデュボン」で新潮ミステリー倶楽部賞を受賞しデビュー。2004年「アヒルと鴨のコインロッカー」で第25回吉川英治文学新人賞、「死神の精度」で第57回日本推理作家協会賞(短編部門)、2008年「ゴールデンランパー」で第5回本屋大賞・第21回山本周五郎賞を受賞。作品に「ラッシュライフ」「陽気なギャングが地球を回す」「重力ピエロ」「魔王」「フィッシュストーリー」「モダンタイムス」「ジャイロスコープ」、エッセイ「仙台ぐらし」ほか多数。映画化された作品も多い。



## 伊坂幸太郎さんと 仙台文学館

2003年9月発行『仙台文学館ニュース』第4号  
「文学のある風景 伊坂幸太郎の書齋」

デビュー間もない頃の伊坂さんをインタビュー。お気に入りの場所だという広瀬川河畔で「読む人によって、好みの作品がバラバラに分かれるような、幅の広い作家になりたい」と自作についてお話をしました。家では気が散るので、街中のコーヒーショップを何軒かハシゴをしながら、または河原のベンチで執筆するのがスタイルとのこと。パソコンに向かう伊坂さんを文学館でお見かけしたのもこの頃でした。



2006年3月4日 「小説の力を信じて」

井上ひさし初代館長が聞き手役となった誌上対談。井上初代館長が「死神の精度」に見られる「諧謔の精神」や「ユーモア」に触れ、「伊坂幸太郎の武器」にしてほしいとエールを送ると、伊坂さんは、物語には不必要かもしれないが「僕にとっては大事なところ」と応えていました。また「オリジナリティ」とは何か、小説のアイデアとはどのようなものか、などについて語り合いました。対談集は完売していますが、『仙台学』vol.3(残部僅少)でお読みいただけます。

小説の力を信じて  
伊坂幸太郎・井上ひさし



(有限会社荒蝦夷発行：問合せ022-298-8455)

これは?

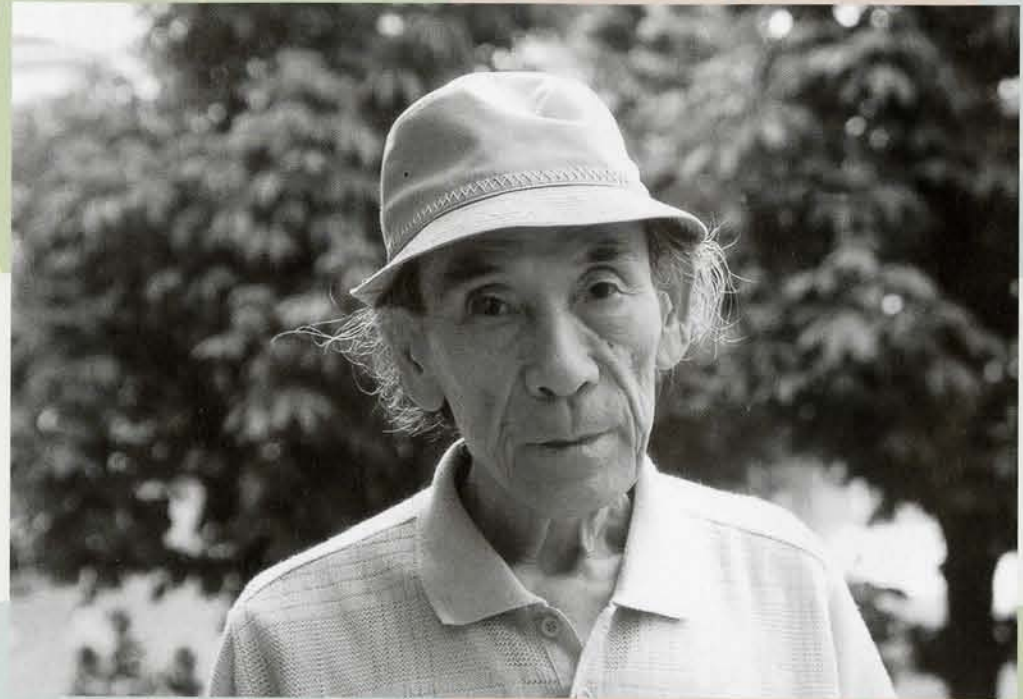
伊坂さんの作品はこれまでに10本以上が映画化されていますが、その中の一つ、2010年公開の「ゴールデンランパー」は、すべて仙台で撮影されました。これは主人公が下水道に潜入するシーンで使用された「マンホールの蓋」。本物そっくりですが、木製で実物よりは軽く造られています。撮影に協力した仙台市建設局から当館に贈られ、今は収蔵庫で出番(?)を待っています。



手塚治虫「火の鳥」黎明編  
虫プロ商事  
1969年12月

# 「まど・みちおのうちゅう」

2016年4月23日(土)～6月26日(日)

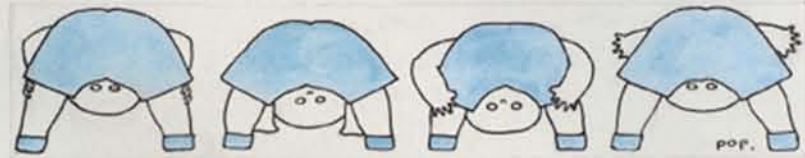


まど・みちお(1992年 川崎市生田にて撮影)

まど・みちお(一九〇九～二〇一四年)は、山口県都濃郡徳山町(現周南市)生まれの童謡詩人です。「ぞうさん」「やぎさん ゆうびん」「ねんせいに なったら」など、誰もが耳にしたことのある童謡や、透きとおった美しさと生命力のある詩を数多く生み出しました。

まどが童謡詩人としてデビューしたのは、二十五歳の時。自作の童謡が児童雑誌「コードモノクニ」で北原白秋の選で特選となったことがきっかけでした。戦後、児童雑誌の編集者として働きながら、詩や短歌を書き溜め、「ぞうさん」をはじめとした童謡作品を発表。その後、フリーとなって創作に専念し、最初の詩集「てんぷらびりびり」で第六回野間児童文芸賞を受賞します。一九九四年には、「小さなノーベル賞」とも呼ばれる国際アンデルセン賞作家賞を受賞。独自の宇宙観あふれるまどの詩が国際的な評価を得ました。

本展では、まど・みちおの童謡詩人としての生涯をたどるとともに、戦中の日記や、自身の詩・童謡論を書き綴ったノートなどの直筆資料をご紹介します。加えて、まどが雑誌社を退職して間もない頃、三年半の間にのめり込むようにして描いた絵画作品も展示します。新しいのちが芽吹く季節、あらゆる生き物のいのちに思いを馳せた、まど・みちおの作品世界にぜひ触れてみてください。

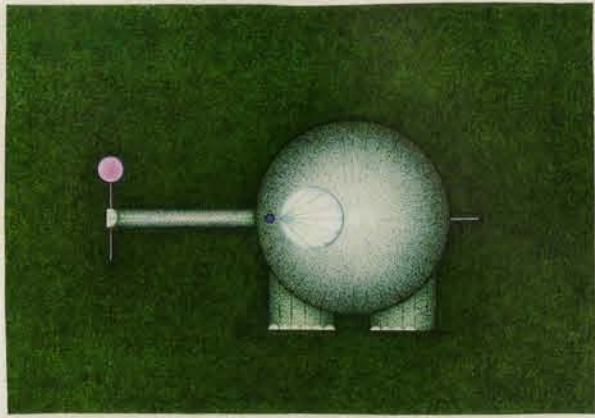


新児童文化集6集から別冊 593枚  
2冊 297分冊 } = 5冊大  
1冊122  
出版2枚

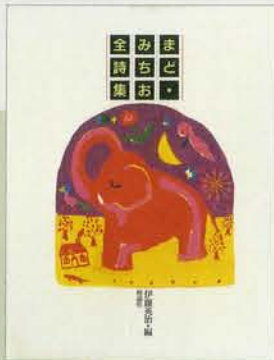
『新児童文化』に掲載されたカット  
編集者時代に担当した雑誌には、まど自身が創作した童謡やカットも掲載されている。

ぞうさん  
ぞうさん  
おはなが ながいのね  
そうよ  
かあさんも ながいのよ

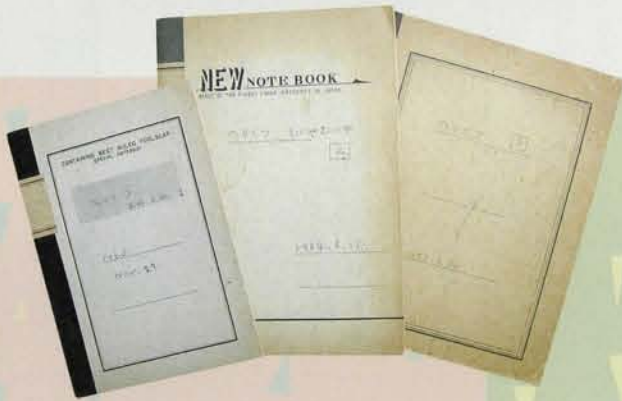
ぞうさん  
ぞうさん  
だれが すきな  
あのね  
かあさんが すきなよ



まど・みちお ぞう(さん) (1977年7月)



『まど・みちお全詩集』  
理論社  
1992年9月  
絵:長新太



へりくつノート  
「へりくつノート」と名づけられた3冊の大学ノート。詩・童謡の理論や批評が、小さな文字でびっしりと書かれており、まどの思考の軌跡がうかがえる。1冊目のタイトルは、「へりくつ あれこれ1」。2冊目は「へりくつ むにやむにや2」。3冊目は「へりくつ3」。

## 周南市美術博物館 まど・みちおコーナー



まど・みちおの生まれ故郷にある周南市美術博物館では、まど・みちおの絵画作品をはじめとした資料が収蔵されています。2014年11月16日、まどの誕生日にあわせて、「まどさんについても会える場所—まど・みちおコーナー」が常設展示室内にオープン。まど・みちおの絵画作品や、関連資料に会いに、訪れてみてはいかがでしょうか。



〒745-0006  
山口県周南市花鳥町10番16号  
TEL:0834-22-8880  
FAX:0834-22-8886  
休館日:月曜日(月曜が祝日または休日の場合はその翌日)、12月29日～1月3日  
開館時間:9:30～17:00(入館は16:30まで)  
常設展観覧料:一般200円、大学生100円  
(団体(20名以上)は2割引)  
※企画展観覧料は、展覧会ごとに別に定めます。

## まど・みちおの「窓」

佐藤通雅(歌人・評論家)



まど・みちおは、戦後最大の童謡詩人です。戦前最大はだれかといえば、北原白秋。白秋の担当していた「コードモノクニ」童謡欄への投稿がきっかけで、まども童謡創作に力を入れていきます。二十五歳の日のことです。以来、二〇一四年二月二十八日に一〇四歳で亡くなるまで、多くの童謡と童詩を創作してきました。「ふたあつ」「つみき」「ドロップスの うた」「やぎさん ゆうびん」「ぞうさん」など、いまでも子どもたちに人気の童謡は、いっぱいあります。まどは、小さいのち、それも人間だけでない、すべての生き物のいのちを大切にしました。童謡を生みだすみなもにのちのは、そういう生命観です。他方童詩では、目のまえにおかれたものから、宇宙のはてまでをとりあげています。極小から極大にわたる世界が、そこに出現します。詩だけではたりず、絵画としても表現してきました。もともとひかえめな彼は、自分から公にすることはありませんでしたが、近年になって多くの作品のあることがわかり、その独創性が高く評価されています。

ところで「まど・みちお」の名前は、「まどみちお」でなく、「まど、みちお」でもありません。「・」が入ります。この中点には、「窓」の意味もたせています。まど・みちおはその「窓」から、小さないのちの数々をとらえ、広大な宇宙へもまなざしを送ってきたのです。どうか戦後最大の童謡詩人の魅力を、存分に味わってみてください。

新資料紹介  
有島武郎書簡  
(吉川銀之丞宛)



有島武郎 1922(大正11)年  
北海道二セコ町・有島記念館  
提供

二〇一五(平成二十七年)五月に有島武郎(一八七八〜一九二三)の書簡が当館に寄贈されました。この書簡は、一九二二(大正十)年九月一日付で、有島の東京の自宅から現・北海道虻田郡ニセコ町にあった有島農場の管理人・吉川銀之丞(一八七五〜一九六二)に宛てたものです。

内容は有島が父から受け継いだ農場経営に関するもので「明日早速十五銀行に至り何とか方策を可講候」(勸業(銀行)より借金之効なきが如き形勢にて金策ニ数々面倒致居候)とあり、農場のための金策に追われている様子がうかがえるものです。「カインの末裔」や「生まれ出づる悩み」(或る女)等を記し、人道・理想・個人主義的な作品で知られる白樺派の代表的な作家として活躍した有島ですが、経済的苦悩を抱えたこの時期、その創作力の衰えは覆うべくもない状態でした。手紙が出された翌年の一九二二(大正十一年)一月、「改造」に発表した「宣言(一)」において、労働者階級と作家である自己との立つ位置の違いに起因する苦悩を吐露し、三月には自らの理想を現実のものにするべく、私有する全財産を放棄し

ます。五月六日付の吉川宛書簡では、「従来貴殿が農場の為に陰日向なく熱心從事せられ候所は感謝致居候次第今後

吉川は一時期仙台で暮らしたことがあり、一九五三(昭和二十八)年頃に、隣家に住んでいた千葉裕男氏(後に「日曜随筆」顧問をつとめた)にこの書簡を譲りました。吉川は、千葉氏が文芸活動で表彰された記念にと書簡を贈り、間もなく仙台を離れたといえます。書簡は千葉氏と交流のあった有島研究者の高橋榮夫氏によって解説され、一九九三(平成五)年には新聞でも大きく紹介されました。その詳細は高橋氏の「白い道」(一九九五年十一月、栄光出版社)に収録されています。千葉氏の遺族から当館に寄贈されたこの書簡は、晩年の有島の懸命な姿を今に伝えてくれています。

〔主要参考文献〕  
高橋榮夫「白い道」(一九九五年十一月、栄光出版社)  
星屋の会編「おもかげ 有島武郎備忘録(一)」(一九九一年八月、星屋の会)  
「有島武郎全集」(一九八五年、筑摩書房)

企画展  
井上ひさしの江戸  
一井上ひさし資料  
特集展 Vol.5



〔江戸と黄表紙4 山東京伝「江戸生艶気棒焼」上〕講演資料

五回目となる今回のテーマは「江戸」。「江戸」を描いた井上ひさしの作品(「手鎖心中」「不忠臣蔵」「東慶寺花だより」など)とその自筆資料を展示しています。「現代の戯作者」とも呼ばれた井上ひさしが、言葉遊びやパロディによる笑いをめざした江戸時代の戯作からどのような影響を受けたのか、そして「江戸」という時代・町をどのようにとらえて、作品を書いたのかに光を当ててご紹介しています。

四月十日まで。  
観覧料  
一般五〇〇円  
高校生  
二〇〇円  
小・中学生  
一〇〇円



発行のお知らせ  
『とんてんかん』  
2号



昨年度の現代詩実作講座の様子

仙台文学館ゼミナール現代詩実作講座(講師・清岳こう)二〇一三年(二〇一五年)の受講生の作品集、詩誌『とんてんかん』2号が間もなく完成します。清岳氏の熱心な指導のもと、一人一人がことばと向き合い、磨き上げ

た作品二十四点を収めています。題字(書家・佐藤華炎)、表紙写真(写真家・家国浩)も受講生の方によるものです。三月下旬から当館受付で販売。四〇〇円(税別)。創刊号(非売品)は当館の情報コーナーでご覧いただけます。

お知らせ  
仙台文学館  
ゼミナール2016



ゼミナールの様子(井上ひさし作品を読む)

「深い言葉の世界を追究し、知的刺激と発見を目指し」、二〇〇七年から開催している「仙台文学館ゼミナール」。第一線で活躍される講師を迎えて、新年度も開講します。「まど・みちおを読む」日本童謡史とまど・みちお(講師・佐藤通雅)、「傑作歴史・時代小説を愉しむ」(講師・高橋敏夫)、「井上ひさし作品を読む」(講師・山口宏子)、「佐伯一麦のエッセイ実作鑑賞講座」ほか。開催日や参加方法などの詳細は、当館はじめ、県内図書館、市民センターで四月以降に配付するゼミナールのチラシ、また当館のホームページや仙台市政だよりでご案内します。



高橋敏夫氏



佐藤通雅氏



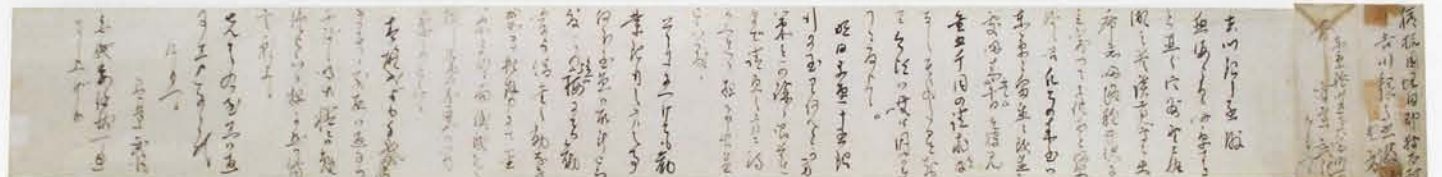
佐伯一麦氏



山口宏子氏

「杜の小径」  
閉店のお知らせ

当館の開館から17年の長きにわたり、郷土料理はっとや企画展メニューなどを提供してきた喫茶「杜の小径」が、4月10日(日)で閉店することになりました。長きにわたり、ご利用、ご愛顧くださいまして、まことにありがとうございました。閉店まで「井上ひさしの江戸一井上ひさし資料特集展 vol.5」に合わせた、最後の企画展メニューを提供します。新しいお店は、春の特別展「まど・みちおのうちゅう」の会期にあわせての閉店予定です。



この書簡は常設展示室でご紹介しています。

有島武郎と仙台

有島は、札幌農学校時代の親友・森本厚吉がいる仙台を何度か訪れていることが、日記や書簡の研究から明らかになっています。特に目立つのは広瀬川の記述です。「朝食後余ハ河内、末光ヲ導キテ仙台見物ヲナシヌ。先師団ヨリ桜岡ノ公園ニ至リ、ヤガテ広瀬河内ニ出テ三人石ヲ敷キテ暫ク小児ノ如ク相戯レタル後、河ヲ横リ向山ナル伊達正宗ノ廟ニ至リ(中略)午後四人ニテ広瀬川ノ上流ニ至リ種々ナル事共語ル」(1903<明治36>年7月4日)。

代表作『或る女』(1919<大正8>年)は、日清戦争前後の日本を舞台に、美しく才気に満ちた女性・早月葉子(新宿中村屋の創業者で随筆家でもある、仙台出身の相馬黒光の従妹・佐々城信子がモデル)の生涯を描いた小説。自我に目覚め、自らの望みに忠実に生きようとするも、旧弊な時代の価値観と常識の前に阻まれ、葛藤し、結局は敗れ去っていく葉子の運命を描いています。作中では葉子がアメリカへ向かう船上で、かつて暮っていた仙台の情景を振り返る場面が描かれます。「さうかと思ふと左岸の岬の上から広瀬川を越へて青葉山を一面に見互した仙台の景色がするすると開け互つた。夏の日北国の空にもあふれ輝いて、白い礫の河原の間を真青に流れる川の中には、赤裸かな少年の群が赤々とした印象を眼に興へた。」重要な場面でのこの描写は、有島の心に刻まれた広瀬川の記憶が反映されているのかもしれない。



『或る女』(前編) 名著復刻全集  
1969年 近代文学館